

みどり

緑のかけはし

<第8号>

〒981-8555
仙台市青葉区堤通
雨宮町1番1号
東北大学農学部・
農学研究科
国際交流委員会
No.8 March.2008

International Communication for Division of Agriculture (ICDA)



た もの かん ことくさいぶん か 食べ物で感じる国際文化



き じま あき ひろ
国際交流委員会委員長 木島明博

国際交流とは国の枠を超えた人と人、組織と組織、文化と文化の交流を意味するものと考えています。それは他国の文化を学ぶことばかりではなく、他国を知って自国を見直してみることであり、そして他国の文化も自国の文化も今に至った歴史、その文化を育てた国民性、地域性を感じ取り、そして学ぶことが大切であると思っています。他国へ行ってその文化と自国の文化とのつながりを感じたときには大きな感動を覚えます。たとえそれがよいことでも悪いことでも感動します。これが国際交流の原点ではないでしょうか。

他国の文化を感じ取ることは、それはまず「衣、食、住」に始まります。これは何も調べる必要はありません。ただ自国との違いを感じ取ればよいのですから。あれは私にとってはじめての外国体験となるのマレーシアに行ったときです。成田から直行で7時間あまり、クアラルンプール上空で着陸態勢に入ったとき、眼下に広がる広大なパーム椰子のプラントを見てはじめて異国を感じました。そして空港に降り立ったとき、マレー系、中国系、インド系と思われる空港職員の方々を見たときには多民族国家マレーシアを感じました。その後、マレーシア農科大学（現マレーシアアプトラ大学）海洋学部の拡充プロジェクトに参画させていただきました2ヶ月間、さまざまな体験をしました。大学の中のゲストハウスに居を構え、毎朝キャンティーンという学生食堂で食べたインド系料理のロツティチャナイとテタリはこくのあるカレーにコンデンスミルク入り紅茶の組み合わせで、眠い目を覚まさせるだけではなく、脳に糖分を補給する朝食として鮮烈な記憶に残っています。昼食はマレー系のナシヤムやナシゴレン、あるいはミーゴレン。いわゆる焼きめし、焼きそばですが、様々な香辛料が日本とは異なり暑いマレーシアならではの味でした。夕食はよく街に出て店の前に広げられた野外のテーブルで中華料理を食べました。しかも一つのストリートが全部中華料理店というところでした。しかし、看板を見ると、広東、四川、福建、・・・など中国各地の名称が書いてありました。屋台に並ぶ肉類、野菜類、魚介類は日本では見られないものばかりでした。パサマラム（ナイトマーケット）にも行きました。高床式のマレー人のお宅（カンボンハウス）にも伺いました。とにもかくにも見るもの聞くものすべてが珍しく、ただただ毎日楽しく過ごしていきました。

ある日、中国系の人とディスコに行きました。日本と同じように若者が明るく踊っていました。そのときインド系の人やインド系のディスコに行こうというので行ってみました。流れている曲も踊りも全く違い、妖艶なものでした。それならばマレー系の人とは尋ね、マレー系のディスコに行ってみました。驚きました。余り踊っている人も多くなく、静かな印象を受けました。このとき「なぜ？」という疑問を持ち、翌日からガイドブックの歴史の部分を読むように

なりました。さらに他民族になった歴史、宗教、習慣、気候、風土、産業、教育などなど、多岐にわたり学ぶようになり、マレーシアという国を深く見るようになりました。そしてはじめてマレーシアの人たちの優しさや暖かさなど内面にふれることができたように感じました。それからというもの、学生さんや教員のみなさんとキャンティーンで遠慮なく食事をし、いろいろな話をするようになりました。

国際交流は無理に勉強するものではないようです。留学生のみなさんも日本を勉強するのではなく、日本を感じるところから始めて下さい。そして日本の文化に疑問を感じたときに調べて下さい。きっと日本がわかると思っています。日本人が理解できると思います。そして自国を見直して下さい。自国には自国の文化があります。その文化を大切にこそ、日本をわかることだと思えます。

衣食住とは農学の研究の基本です。衣食住の違いこそが文化の違いを表しているのだと思います。農学は心と心の国際交流の基盤となる学問だと考えています。農学は生活の基盤であるばかりではなく、人と人、国と国、心と心の交流の基本だと確信しています。

留学生紹介

昨年4月・10月に新しく14名が新たに留学生としていらっしゃいましたのでご紹介します。

- | 事項 | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 国籍 2. 年齢 3. 在籍課程 4. 所属分野 | <ol style="list-style-type: none"> 5. 研究テーマ 6. 出身校 7. 趣味・特技 8. 自己紹介 |

Deffi Ayu Puspito Sari

1. インドネシア
2. 25歳
3. 大学院博士前期課程
4. 資源政策学
5. 食肉生産における食品トレーサビリティシステムに関する研究
6. ボゴール農業大学
7. 旅行、インドネシアの踊り
8. インドネシア出身のデフフィと申します。昨年の4月から「ヒューマン・セキュリティと食糧・農業プログラム」に在籍しています。私はもっと日本語を上達させて、たくさん日本人の友達が欲しいです。もしインドネシアに旅行に行く時は私にいろいろ聞いて下さい。宜しくお願いします。



6. カセサート大学
7. バドミントン・テニス
8. 私は日本へ来る前にタイの Kasetsart 大学で修士号を取得し、その後 Rajamangala 大学で教官として働いていました。東北大で、食糧科学の技術について研究できることになり、非常にうれしいです。私の趣味はテニスとバドミントンです。これから日本の文化をもっと学び、多くの友人を作りたいです。

Vichasilp Chaluntorn

1. タイ
2. 33歳
3. 大学院博士後期課程
4. 機能分子解析学
5. Unsaturated lipid and Vitamin E



伍 颺

1. 中国
2. 26歳
3. 大学院研究生
4. 経営情報学
5. 食品の安全性を担保する政策制度の国際比較に関する研究
6. 華東理工大学
7. 映画、旅行、卓球
8. 日本に来て自分の学びたい分野の勉強をすることができるのは本当に嬉しいです。皆さん、梅の香漂うこの季節に、自分の夢に向けて一緒に頑張りましょう！



チャオ ゴオ ゼン
巢 国 正

- 1. 中国
- 2. 34 歳
- 3. 大学院博士後期課程研究生
- 4. 機能形態学
- 5. 骨格筋におけるセロトニン受容体の発見様式とその機能の解明
- 6. 中国農業大学
- 7. 音楽、読書、インターネット
- 8. はじめまして、巢国正と申します。十月の初めに北京から仙台に参りました。今、大学院博士後期課程の研究生です。仙台はきれいで便利です。これから、いろいろな友達を作りたいです。どうぞ、宜しくお願いします。



ナム ウォン シク
南 阮 植

- 1. 韓国
- 2. 27 歳
- 3. 学部研究生
- 4. 沿岸生物生産システム学
- 5. 東アジアにおけるウニ類の集団構造に関する遺伝育種学的研究
- 6. 江陵大学
- 7. スポーツ、釣り
- 8. 私は2年前に来日し、1年間日本語学校に通いました。今では日本の食べ物にすっかり慣れてしまい、辛い物があまり食べられなくなりました。現在は、ウニ類の保全に関する研究を行っています。どうぞよろしくお願ひします



フゲ ジレト
呼 格 吉 乐 图

- 1. 中国
- 2. 24 歳
- 3. 学部研究生
- 4. 機能分子解析学
- 5. リピドミクス：LC-ns/ns による生理活性脂質の網羅的検出・定量法の開発
- 6. 中国内蒙古農業大学
- 7. スポーツ（サッカー、ビリヤード等）、音楽鑑賞
- 8. フゲジレトと申します。モンゴル民族の中国人です。内蒙古農業大学から来ました。2007年5月に東北大学に参りました。私は日本の先進の科学と技術を勉強しながら日本の文化と生活を体験したいと思います。皆さん、これからも宜しくお願い致します。



ソ ワン ヒ
徐 杭 希

- 1. 韓国
- 2. 36 歳
- 3. 学部研究生
- 4. 経営情報学
- 5. 農食品の安全性
- 6. 光州大学
- 7. 旅行
- 8. 私は2007年10月に日本へ来ました。約12年間、農林関連の仕事をしていました。東北大学で農林についての研究をすることができて嬉しいです。日本のことをたくさん知り、友達もたくさん作りたいです。どうぞ宜しくお願いします。



シュウ ユウ エイ
周 涌 衛

- 1. 中国
- 2. 32 歳
- 3. 学部研究生
- 4. 生体分子機能学
- 5. 乳酸菌によるリパーゼ阻害性測定
- 6. 福建農業大学
- 7. 音楽鑑賞、スポーツ
- 8. 私は中国福建省の出身で、2年前に日本に参りました。今、生体分子機能学研究室に在籍しています。人の健康のための機能食品に関する知識を学びたいと思っており、将来、その分野における中日交流を促進させたいです。趣味はスポーツ、特にサッカーですが、日本に来てからはサッカーをする機会があまりなくて残念です。



ガルダメス カスティーヨ アナ マルレネ
Galdamez Castillo Ana Marlene

- 1. エルサルバドル
- 2. 31 歳
- 3. 学部研究生
- 4. 水圏資源生態学
- 5. 未定
- 6. エルサルバドル大学
- 7. 読書、音楽鑑賞
- 8. はじめまして。私は生物学の学士を取得し、母国エルサルバドルの農業家畜省の水産分野で働いていました。エルサルバドルの発展に貢献したいと思い、修士課程で水産科学分野の研究するために日本へ来ました。私は森をはじめ自然が好きです。日本は大きなビルがある一方で、自然を満喫できる場所もあり気に入っています。



ス チン ムン フ
ス 欽 孟 和

- 1. 中国
- 2. 37 歳
- 3. 学部研究生
- 4. 経営情報学
- 5. 農業及び化学肥料が土壌性能に及ぼす影響
- 6. 内蒙古師範大学



7. バスケットボール、卓球

8. 私はスチンムンフと申します。出身は中国の内モンゴルです。内蒙古師範大学で地理学を専攻して卒業した後、数年間農村地区の役所で政府職員として勤めていました。内モンゴルでは、数十年に渡った農業開発に伴い、極端に食糧生産を追求した結果、土壌生態の破壊が急激に増加しました。特に農業や化学肥料などの不合理な使用により、土壌汚染問題が著しくなっています。しかし、現在この問題に対して研究があまり進んでいません。また、技術の面でも立ち遅れています。よって、私は日本の先進的な農業技術を学び、技術を内モンゴルへ導入したいという希望を持って、昨年9月28日に日本に参りました。仙台は美しい所で、学習と生活にとって良い環境です。皆さん宜しく願います。

コウ ヒ
高 旭

- 1. 中国
- 2. 24 歳
- 3. 学部研究生
- 4. 水圏植物生態学
- 5. 海藻生態学
- 6. 中国海洋大学



7. 旅行、卓球、バスケットボール、歌

8. 私は青島の中国海洋大学から来ました。日本が大好きです。今は研究生として研究をしています。趣味は卓球やバスケットボールなどです。たくさんの日本人の友達を作ろうと思っています。皆さん、どうぞよろしく願います。

オウ リク ショウ
汪 陸 翔

- 1. 中国
- 2. 21 歳
- 3. 学部特別聴講学生
- 4. 水産資源化学
- 5. 食品の安全性について
- 6. 上海水産大学



7. 旅行、サッカー、映画鑑賞

8. 1年間日本に在住しますが、この1年はとても貴重なものです。日本語を勉強しながら自分の専門分野についても一生懸命勉強しています。若いうちにいろいろな経験をしたと思っています。

ゴ イ ジャエ
郭 熠 洁

- 1. 中国
- 2. 23 歳
- 3. 大学院博士前期課程特別研究生
- 4. 機能形態学
- 5. Functional characteristics of bovine monocytes
- 6. 揚州大学
- 7. 歌、ダンス



8. 私は中国陝西省西安市出身の郭と申します。2006年に揚州大学を卒業し、同大学大学院の修士課程に在籍しています。2007年10月に交換留学生として東北大学に来ました。たくさん勉強をして、新しい技術や知識を習得したいと思っています。

ジョ カ ホウ
徐 科 鳳

- 1. 中国
- 2. 25 歳
- 3. 大学院博士後期課程特別研究生
- 4. 沿岸生物生産システム学
- 5. 「アカザラガイのミトコンドリア DNA 全塩基配列の解明」
- 6. 中国海洋大学
- 7. 映画鑑賞、買い物



8. 中国から来たジョと申します。中国海洋大学と東北大学連携教育プロジェクトの博士生です。日本に来てばかりで日本語ができないですが、学友の皆さんの協力のおかげで楽しく生活をしています。日本の文化にとっても興味を持っているので、これから実験をしながら日本語の勉強を進めて、日本人の学生との交流を深め、日本の文化をいろいろなことから体験したいと思います。皆さん、よろしく願います！

平成19年度学術交流協定校間交流および活動実績報告

韓国・済州大学、イタリア・ラキユラ大学実験医学部、スウェーデン農科大学獣医学部

動物生殖科学分野 教授 佐藤 英明

● 済州大学

平成 18 年 12 月 10 日～12 日、佐藤英明が済州大学を訪問し、済州大学教授総会会長のカン・ミンスン教授主催の勉強会に出席し、韓国においても進行中の国立大学の独立行政法人化について情報交換を行った。この勉強会については、韓国の新聞に取り上げられた。また、6th CJK Symposium (チュンガン大学、平成 19 年 6 月 28 日)、3rd Korea-Japan Joint Symposium in Animal Reproduction (東京大学、平成 19 年 10 月 18 日) で佐藤英明が講演を行ったが、カン・ミンスン教授や済州大学の研究者も出席し、意見交換を行った。また、カン・ミンスン教授他 5 名が仙台に来られ、済州馬や済州島の在来牛 (わが国の黒毛和種と酷似) の育種計画について意見交換を行った。この意見交換の内容の一部について「畜産技術」第 630 号 (畜産技術協会・平成 19 年 11 月発行) に紹介した。

● イタリア・ラキユラ大学実験医学部

博士課程 3 年次に 2 ヶ月間、特別研究学生として動物生殖科学分野で実験技法などを修得した Maria Grazia Palmeriri が平成 19 年 6 月に博士号を取得した。原著論文や博士論文の執筆に平成 19 年 12 月に助教となった星野由美が支援した。また、イタリア・テラモ市で開催された第 7 回イタリア獣医生理学会に教授の佐藤英明が招待され、基調講演を行ったが、大会期間中及びその後、ラキユラ大学においてイタリア外務省への研究費共同申請について打ち合わせを行い、申請書を完成させ、提出した。また、平成 19 年度において Dr.G.Macchiarelli 博士と原著論文 1 編、総説 1 編を共同で執筆し、投稿した。

● スウェーデン農科大学獣医学部

平成 19 年 7 月 10 日、米国・サンアントニオ市で開催された General Assembly of the World Association (WAAP) に日本代表として教授の佐藤英明が出席し、スウェーデン代表で出席したスウェーデン農科大学教授と WAAP のあり方や畜産学領域における日本・スウェーデンの協力関係について意見交換を行った。また、スウェーデン農科大学の H.Rodriguez-Martinez 教授と佐藤英明とは Reproduction in Domestic Animals の編集長、副編集長として絶えず、投稿論文の査読者の仕上げや論文採否に関する最終判断について意見交換を行っている。また、メールを通し卵管の精子貯留メカニズムについて共同研究を行なっているが、これには動物生殖科学分野出身で先進工医学機構助教の横尾正樹も関係している。

● 中国海洋大学、上海水産大学

水産資源化学分野 教授 佐藤 英明

平成 19 年は私が国際交流窓口を務めている中国の二大学との交流があったので報告する。一つは、東北大学との大学間交流協定を結んでいる中国海洋大学 (旧青島海洋大学) から呉徳星学長を仙台にお迎えした。昨年 8 月に開催された東北大学創立 100 周年記念式典参加のため仙台を訪れた呉先生と秘書の蔣さんに、スチューデントアンバサダーの理学研究科の呉礼さんと農学研究科の星野由美さんと行動を共にした。到着日は 100 周年記念まつり祝賀会 (野外パーティー)、式典当日は橋本副総長との面談から始まり、農学研究科長表敬訪問、総長主催昼食会、記念式典、懇親会カクテルパーティー、総長主催晩餐会、農学研究科運営会議構成員との懇親会など、分刻みのスケジュールをこなされ、翌日朝に仙台空港から帰国された。実に忙しい滞在であったが、合間を見て今後の教員、学生の交流の促進などを話した。

二つめは、農学研究科が部局間交流協定を締結している上海水産大学を、11 月に小職が訪問し、食品学院で

大学院生への集中講義を行ってきた。講義は月曜日から土曜日までの1週間、朝8時30分から11時30分、午後6時から同9時まで、これに時に午後3時から5時の講義も加わり、実にハードな講義であった。夜間の講義は全寮制で、構内に学生が寝起きしていることで可能だそうである。

私は日本語で講義したが、研究室大学院博士課程修了生の奚印慈博士（上海水産大学助教授）が通訳をしてくれたお陰で学生は熱心に講義に集中し、夜9時の講義終了後に書いてもらった感想文は、簡単にと話したにもかかわらず、レポート用紙2枚、3枚、4枚と

びっしり漢字（もちろんだが）で書かれていた。訳して貰ったら、絶賛の言葉が並んでいたようで、上海水産大学の先生方にも回覧するとのことであった。タイトなスケジュールを調整し、ようやく実現した集中講義であったが、講義の内容に幾分なりとも興味を持って貰ったと安堵している。

上海を離れる日曜日には早朝にもかかわらず大勢の学生が見送りに集まってくれ、一人一人と握手をし、記念撮影し別れた。講義中も何人かの学生から研究室、農学研究科への留学希望が聞かされた。農学部には3年前から上海水産大学の学部3年生が特別聴講学生として1年間滞り、勉学している。今後も学部学生、大学院生、教員の交流が活発になることを祈る。



学生との集合写真（上海水産大学）

大学間学術交流提携校：揚州大学（中国）動物科学院を訪問して

動物資源化学分野 教授 齋藤 忠夫

2007年10月17～20日まで、揚州大学を訪問して学術交流を行いました。揚州大学は、学生数3万4千人を擁する総合省立大学であり、研究業績でも中国ベスト57に入る大学として知られています。

私たちは、上海市で開催された第4回アジア乳酸菌会議に出席し、17日午後には揚州大学動物科学院の趙国琦教授に出迎えて頂き、揚州市（江蘇省）を訪問しました。

18日には、陳国宏動物科学院院長の挨拶で、学術講演会が開始されました。まず川井泰助教の講演があり、ついで私より「日本におけるプロバイオティック乳酸菌を利用した機能性ヨーグルトの開発研究」の講演を行いました。講演後の質問も非常に多く出て、活発な質疑応答が行われました（写真上）。

19日には、揚州大学と動物科学院の見学を行い、夕刻には動物科学研究者との意見交換会を含めた晩餐会に招待されました（写真下）。日本への帰路には、大学院生の陳旭佛君を仙台までお連れし、農学研究科で2週間の研修に入ってもらいました。

揚州は2500年の歴史のある都市であり、古くから水運に恵まれ、北は淮河、中部は京杭大運河、南は、長江（揚子江）が悠久の流れを見せています。揚州市は江澤民国家主席の出身地でもあり、市内にある鑑真和上ゆかりの大明寺や湖と庭園が美しい瘦西湖でも有名です。



揚州大学での講演（齋藤教授）



共産党書記長、大学スタッフとの会食会
（左から5人目が書記長、ついで齋藤教授、川井助教）

今後、お互いの大学の研究者と大学院生のそれぞれの研究者層での活発な学術交流が続き、多くの研究成果が挙げられることを祈っています。

■ 台北医学大学との学術交流報告

えいようがくぶん や きょうじゆ こま い みち お
栄養学分野 教授 駒 井 三千夫

2007年は、3回の交流がありました。まずは、昨年度になりますが、3月18日から23日にかけて、駒井が講演の招待を受けて訪問し、組織内活性型ビタミンKの新規機能に関する研究で講演を行いました (Physiological significance of menaquinone-4 (= vitamin K2) formation in the rats tissues from ingested vitamin K analogues.)。その時に、今後の共同研究の可能性や学生交流について話し合われました。また、台北医学大学で博士号を取得して台湾国立の中央研究院に就職したポストドク研究員の案内で、世界的に最先端な研究施設も見学できました。



ひだり こま い ちんじんらんせうじゆ くだうけんきゆう か ちやう ちんやーりん
左から駒井、陳俊榮教授、工藤研究科長、陳雅林さん

年度が変わり、6月25日から3日間台北医学大学の陳俊榮教授と大学院学生14名が来訪しました。陳教授によるセミナーが行われ、当研究科内から多くの聴衆が参加しました (演題: Physiological Functions of Soy Protein and It's Hydrolysate)。我々は、当研究科の先端研究施設等の案内を行いました。大学院生のうちの一人 (陳雅林さん = D3) が、栄養学分野に3週間滞在して、実験手技の研修やゼミに参加しました。写真は、工藤研究科長室を訪問した時のものです。



たいべい い がくだい がく ほんがくだい がく いん のう がく けんきゆう か ぐらうりゆう けいしやう かい
台北医学大学と本学大学院農学研究科との交流昼食会 (台北国際会議場)

さらに、9月9日から13日までの間に台北市で開催されたアジア栄養学会議に参加し、教員のみならず大学院生同志の交流が実現しました。発表の内容の質疑についてはもちろんのこと、大学内の見学と大学院生同士の交流が行われました。写真は、最終日に学会会場のレストランに招待された昼食会の様子です (台北医学大学と本学大学院農学研究科との交流昼食会)。

台北医学大学の非常勤職員となっておられる滞米中の台湾農芸化学会の元会長の陳世爵特任教授、謝明哲学院長、王有忠教授ほか、栄養学分野からは駒井教授、白川准教授、Ardiansyah 博士研究員、杉田弓美さん、佐藤祥子さんが参加しました。本研究科を訪問された時には、同等に立派なもてなしの対応が必要だと感じた次第です。

■ 中国科学院上海有機化学研究所と農学研究科との交流

きのうぶん し かいせきがくぶん や きょうじゆ みや ざわ てる お
機能分子解析学分野 教授 宮 澤 陽 夫

中国科学院上海有機化学研究所 (Shanghai Institute of Organic Chemistry (SIOC), Chinese Academy of Sciences (CAS)) は1950年に設立され、有機化学、天然物化学、分析化学、合成化学、生物物理化学、食糧化学などに関する中国科学院の中核機関のひとつです。研究所には約70名の博士研究者がおり、おおくは中国国内の大学の教授等を兼務しています。交流の対応研究者は宮澤の他に、生物有機化学の桑原重文教授、生体物理化学の山下まり教授です。SIOC は Biao Jiang 所長、Jin-Ye Wang 教授、Amin Cao 教授が対応研究者です。

SIOCのJin-Ye Wang教授(上海交通大学教授兼務)は農学研究科の食品学教室で国費留学生として研鑽し1992年に農学博士の学位を得、それ以来、国際交流の一貫として共同研究が進められてきています。昨年、勝山館で開催された第15回生体パーオキサイド研究会(The 15th Sendai Conference on Lipid Peroxide Biology and Medicine)では、“Effect of asymmetric distribution of phospholipids in ghost RBC membrane on peroxidation induced by ferrous ion”と題した講演をしていただきました。今年の10月にCAS生物物理研究所(北京)のBao-Lu Zhao教授が主催する国際フリーラジカル会議が北京で開かれますが、LC-MS/MSを用いた「ヒトの疾病にかかわる脂質ヒドロペルオキシドの一斉網羅解析」について共同研究の成果をそこで講演する予定であります。今後も有意義な国際連携のひとつとして交流を進めたいと考えております。

■ ガジャマダ大学およびブラウイジャヤ大学(インドネシア)との交流

資源政策学分野 教授 米倉 ひとし 等

7月および10月の2回、学术交流協定校であるインドネシアのガジャマダ大学を訪問、研究と調査を行った。東京大学とボゴール農科大学を拠点校とする学術振興会の拠点大学プログラムの一環で、協力校として参加している。テーマは、持続可能な農業の実現のための社会科学的調査研究である。本年は、最終年にあたり最終報告書の一部となる論文の検討のほか、フィールドの視察も行った。

ガジャマダ大学のあるジョグジャカルタ特別州の南部は、石灰岩の丘陵地帯でインドネシアでも有数の貧困地帯として知られた地域、主食は今なおキャッサバ芋である。花崗岩を段状に配して土地を確保しそこにチークやアカシアの木を植林すると同時に、わずかの農地でキャッサバ芋やトウモロコシの栽培を許して、貧困な農家の経済を支えるプログラムが政府主導で行われている。村の中も荒々しい花崗岩がむき出しで、生活の厳しさを感じさせる。しかしその土地で働く農民たちはみな健康で明るい。また、隣接する中ジャワのウォノギリ・ダムも訪問した。治水、農業灌溉そして発電のためにかつて日本も資金援助をして建設された巨大な人造湖であるが、近年急速な沈砂のためにその機能が損なわれて問題になっている。いずれも、持続可能な農業を考える上で、課題を提供してくれる興味深い事例で、新たな共同研究を模索中である。

また、学术交流協定校ではないが、インドネシアの東ジャワ州マラン市にあるブラウイジャヤ大学も10月に訪問した。本学の4つの研究科が連携して行っているヒューマンセキュリティ・プログラムとの協定校で、同大学経営学部とのダブルディグリーによる留学プログラムが来年度からスタートする。前期課程の2年次より本学で受け入れ、1年で修士号を与えるプログラムで、その準備のための訪問だった。すでに日本留学予定の16名が就学中で、彼らの中から最多4名を本学で受け入れるべく、全員と2回予備面談をした。インドネシアの地方および中央の公務員の再教育が狙いで、地方分権化した開発行政の指導的公務員育成が課題である。英語はみな良くでき、コミュニケーションが容易であった。TOEFLのPBTで633点という院生もいて、心強く思われた。このような優れた院生を一人でも多く受け入れることが出来れば、と期待が膨らんだ。



ガジャマダ大学農学部社会経済学科の教職員によるイスラム正月直後の新年会(シャワランと呼ばれる行事)。敬虔な祈りの後のカラオケ大会、私も教え子のジャムハリ先生と歌う羽目に。



ダブルディグリーの協定締結時にお世話になったブラウイジャヤ大学経済学部のマルユナニ先生(最前列右端)の教授就任式(左から2番目がスギト学長)

附属施設見学の実施

1月19日、20日に農学部・農学研究科に在籍する留学生を対象として、女川にある複合生態フィールド教育研究センターへの見学旅行が実施されました。

以下は参加者の感想です。

植物遺伝育種学分野 准教授
北柴 大泰

平成20年を迎えた1月の19、20日の両日に渡り、農学研究科の留学生と一緒に女川フィールドセンターを訪れました。この日は大寒を直前に控えるとても寒い日でしたが、中国および韓国からの8名の留学生が参加しました。私は初日の交流会からの参加で、食卓には鮑、帆立、なまこ、いか、牡蠣などの豪華な食材が並び、刺身に鍋に茅台（マオタイ：中国の超高級なお酒）に「好吃（ハオチー）、好喝（ハオホー）」と留学生の方々と共に舌鼓を打ち楽しいひとときを過ごしました。特に、鮑やなまこを刺身用に捌く姿は彼らにはめずらしく、一コマずつ写真に収めている留学生もいました。この夜の交流会が盛り上がったことは言うまでもありません。

翌日は雪がはらりと舞うなか実習船に乗りこみ、養殖場を見ながら木島先生、尾定先生の説明に耳を傾け、短い時間ながらもクルージングを楽しみました。ここでも盛んに写真撮影が行われ、タイタニックの有名な一場面(?)も見られました。その後港に戻って、菅野先生から施設の見学、研究紹介をしていただきました。私にとっても初めての訪問でしたので、非常に興味深く、新鮮な経験を持ち帰ることが出来ました。また、留学生の方々と距離がさらに縮まった良い小旅行でした。留学生のみなさん、これからも「加油（ジャーヨウ：頑張って）」ください。

分子生物学分野 准教授
原田 昌彦

平成20年1月19日から20日にかけて、農学部の留学生を対象として、女川フィールドセンターへの施設見学と交流会が行われました。雨宮キャンパスからは中国からの5名の留学生が参加し、また女川フィールドセンターで学ぶ3名の留学生（中国から2名、韓国から1名）も現地で合流し、合わせて8名の留学生の参加がありました。私は国際交流委員会の委員として、木島委員長、石井委員、北柴委員と共にこの会に参加、さらに職員として教務の穴澤さん、国際交流支援室の安倍さんにも加わっていただきました。

仙台から参加した留学生の一行は、木島委員長および職員の方と松島水族館を楽しんだ後、午後にはマリナル女川を見学しました。私はマリナル女川の見学から合流しましたが、この頃には、留学生同士も、また付き添いの職員ともすっかり打ち解け、それぞれ見学を楽しんでいたようです。マリナル女川の訪問のもう一つの目的は、夜の交流会での食材の買い物であり、木島委員長の指導の下、新鮮な海の幸を手に入れることができました。

女川フィールドセンターでの夕食では、尾定准教授、菅野助教をはじめとする木島研究室のメンバーと共に準備した三陸の幸満載の料理を、皆で囲みました。日本のお酒に加えて、いくつかの中国酒も交流の席に登場し、それぞれの国のお酒にまつわる話を披露しながら、賑やかに交流の輪を広げることができました。

翌日の施設見学は、平塚船長の操縦する「すいこう」での女川湾のクルージングから始まりました。当日の海は風もなく穏やかで、留学生の皆さんも写真を撮り合うなどして、なかなか見ることのできない海からの三陸海岸の風景を楽しみました。その後は、スタッフの丁寧な解説の下にフィールドセンターの見学をさせていただき、留学生にとっても、また我々にとってもフィールドセンターの特徴や研究を知るとも良い機会となりました。

昼食後、充実した内容の施設見学に、皆、満足した表情でそれぞれの帰路につきました。今回の見学会では、女川フィールドセンターのスタッフや学生の皆さんに大変お世話になりました。

しげんけいざいがくぶん や じゆんきやうじゆ
資源経済学分野 准教授
いし い けいち
石井 圭一

のうがくけんきやう か りやうがくせい たいしやう しせつけんがく
農学研究科の留学生を対象とした「施設見学および
こうりゆうかい さん か おながわ ふくごうせいたい
交流会」に参加しました。女川の複合生態フィールド
きやういっけんきやう おとす わたし はじ せん
教育研究センターを訪れるのは私も初めてでした。仙
だい せんせきせん の いしのまきほうめい む かいめ
台から仙石線に乗り石巻方面へ向かうのは2回目のこ
とですが、しやそう み ふうけい き い
車窓から見える風景が気に入っています。
まつしまわん しまじま なが うみ て とど
松島湾の島々を眺めながら、海に手が届きそうなほど
かいがわん れつしや すす
海岸すれすれを列車が進んでいきます。

おながわ き じませんせい おさだせんせい かんの せんせい
女川センターでは木島先生、尾定先生、菅野先生を
はじめ、けんきやうしつ がくせい ふゆ おながわ あじ たん
はじめ、研究室の学生さんたちが、冬の女川の味を堪
能させてくれました。なまこやあわび、ほたてやかき
などが、てぎわ つよ ちゆうごくしゆ
手際よくさばかれます。とても強い中国酒な
どもさし入れられ、ねつき むんむんの 鍋大会です。たい
へんアットホームな研究室の雰囲気はとても印象的でした。

よくじつ ちやうさ じっしやうせん すいこう じやうせん おながわわん のうがくけんきやう か きやうしよくいん
翌日は、調査実習船「翠皓」に乗船し、女川湾をクルージング。農学研究科の教職員であっても、なかなか体験で
きることはありません。1月の寒い朝ではありましたが、船などめつたに乘る機会のない私めたいへん興奮しました。

せんせいがた おながわ がくせい さん か りやうがくせい おも で
先生方をはじめ、女川の学生さんたちにはたいへんお世話になりました。参加した留学生のみなさんも、思い出に
のこ しせつけんがく こうりゆうかい
残る施設見学・交流会になったのではないのでしょうか。



まつしますいぞくかん きねんまつえい
松島水族館で記念撮影

かんきやうてきおうせいぶつこうがくぶん や
環境適応生物工学分野
ゴ キョウ ラン
呉 暁 嵐

がつ にち はつか ふつかかん たいへいよう めん おながわ ふくごうせいたい きやういっけんきやう けんがくりやう さん
1月19日・20日と2日間にわたり、太平洋に面した女川の複合生態フィールド教育研究センターの見学旅行に参
か
加させていただきました。

けんがく にち め まつしますいぞくかん けんがく き じませんせい すいぞくかんしよくいん じんぐう すいぞくかん うらがわ
見学の1日目は松島水族館とマリパルの見学でした。木島先生と水族館職員の神宮さんのおかげで水族館の裏側
み いちばん おも で よる せんせいがた がくせい
も見せていただき、アシカショーとかわいいペンギンは一番の思い出になりました。夜は、先生方と学生たちみんな
きやうりよく おいしい 鍋パーティー おこな わたし なま あわび た
の協力で美味しい鍋パーティーを行いました。私は生のナマコと鮑を食べたことはありませんでしたが挑戦してみま
した。ちょっと硬かったのですがおいしかったです。皆で料理を食べたり、学校のこと、日本と中国の文化や習慣、
しょうらい ゆめ
将来の夢などについていろいろコミュニケーションをとりしました。

けんがく ふつかめ おながわわん じっしやうせん じやうせん おながわ けんがくわん さんりく
そして、見学2日目、女川湾で実習船に乗船してもらいました。女川フィールドセンターが面する女川湾は三陸
しきかいがわん なんたんぶ おしはほんとう きぶひしがわ い く りやうこう みなみ だんりゆう ころしお きた かんりゆう
リアス式海岸の南端部である牡鹿半島の基部東側に入り組んだ良港であり、南から暖流である黒潮、北から寒流であ
る親潮が混合する複雑な海況を呈し、きわめて豊かな生産性を持つ世界三大漁場の一つに数えられています。また、
かいがわん がんしやう ちたい ほとん し だんりゆういき かんりゆういき せいぞく たしゆたよう かいさんしよくぶつ かいそうらい かいめんどうぶつ
海岸は岩礁地帯がその殆どを占め、暖流域および寒流域に生息する多種多様な海産植物（海藻類）や、海綿動物から
せきつどうぶつ すべ どうぶつもん かいさんどうぶつ せいぞく
脊椎動物までの全ての動物門の海産動物が生息しています。

おながわわん ふゆ げしき さん か りやうがくせい せんせい しよくいん ねつじやう わす がた きおく のこ おも うつく
女川湾の冬景色は、参加した留学生、先生と職員の皆さんの熱情とともに、忘れ難く記憶に残したいと思うほど美
しいものでした。

えんがんせいぶつせいさん がく
沿岸生物生産システム学
ナム ウオン シク
南 阮 植

まつしますいぞくかん れきし すいぞくかん みる しせつ こていけんねん ないぶ はい
松島水族館は歴史のある水族館だけに古くて施設もよくないという固定観念がありましたが、内部に入っている
けんがく あつか せいぶつ かず おお こじんてき きやうみ めずら どうぶつ およ たの
見物してみると、扱っている生物の数も多くさらに個人的に興味のある珍しい動物などが泳いでおり、楽しくまた
べんきやう かいさんしよくぶつ せいぞく
勉強にもなりました。また水槽の裏側を見学し、TVでさえ見たことのないイロワケイルカを自分の手で触ってみる

ことができ、大変面白い経験になりました。特に生まれて初めて見たアシカショーは感動でした。

松島水族館の見学が終わってフィールドセンターに向かう途中でマリナル女川を見学しました。マリナルには何回行ったことがあります、今回はスタッフの方から、女川の漁業や歴史などをいろいろと教えてもらい、あらためて面白い体験ができました。夜は、他の留学生のみなさんと先生方とお酒を交わしながら交流を深めることができ、とても楽しい貴重な時間となりました。

きのうけいたいがくぶん や
機能形態学分野
ゴオ イ ジャエ
郭 熠 洁

1月19日から20日に、女川のフィールドサイエンスセンターの見学に行きました。すごく、楽しかったです。最初に松島水族館に行き、そこで生まれて初めてイルカに触りました。次に、マリナルを見学しました。そこには、私の故郷である中国の西安では見ることのできない、いろいろな種類の海産物があり、その日の夕食のための食材をたくさん買いました。その後フィールドサイエンスセンターで、鍋を作ってみみんなで食べました。とてもおいしかったです。翌日、沿岸生物生産システム学の研究室へ見学に行きました。そこで、アワビの養殖方法を学びました。アワビはとてもゆっくり育つので、アワビの研究はとても難しいと思いました。

きのうけいたいがくぶん や
機能形態学分野
チャオ ゴオ ゼン
巢 国 正

1月19日と20日に、木島教授は私たち留学生を女川の複合生態フィールド教育研究センターの見学に連れて行って下さいました。教務係の穴澤さんと国際交流支援室の安倍さんも同行して下さいました。

19日の11時、地下鉄と電車を乗り継ぎ松島水族館に到着しました。この水族館はあまり大きくないですが、動物の数は3,000以上にも達します。各種のペンギンが池の縁に立ったり泳いだりして幸せそうでした。カリフォルニアアシカのショーはユーモアがありおもしろかったです。

午後、また電車で女川へ行き、まずマリナル女川を見学しました。おさかな市場でいろいろな新鮮な魚介類や水産加工品を販売していました。一部の魚や貝は一度も見たことがありませんでした。夜の交流会もにぎやかで、うれしかったです。

翌朝、翠皓に乗船し、きれいな海を見ました。その後、木島教授と菅野助教が複合生態フィールド教育研究センターの研究施設及び研究内容を詳しく紹介して下さいました。

今回の見学はいい勉強になりました。もし機会があれば、また行きたいと思います。

しょくぶつ い でんいしゅがくぶん や
植物遺伝育種学分野
リ ホウ
李 鋒

2008年1月19日と20日、農学研究科国際交流委員会の周到なご準備のおかげで、楽しく、面白い施設見学に行かせていただきました。19日は寒くて路面に厚い積雪がありましたが、参加者の皆さんとお会いし、話をして、温かい気持ちになりました。11時頃松島水族館に到着し、水族館のスタッフの皆さんが私達を親切に受け入れて下さり、海洋動物の名前から飼育方法まで、全館にわたり詳しく案内して下さいました。松島水族館は1927年に開設されて、これまで、寒い南極から熱帯にかけてのたくさんの種類の海洋動物を育てているそうです。それは大変なことで、豊富な知識と高度な飼育技術を備えていなければいけないことだと思います。午後3時頃女川に到着し、まず、女川の新鮮な魚介類や水産加工品の流通販売を目的とした、新鮮美味が実感できる物流センターのマリナルIを、次にマリナルIIを見学しました。マリナルIIは魚と海洋をテーマにした知の遊園地のようだと感じ、いろいろな驚きと発見、夢と好奇心を広げました。夜、複合生態フィールド教育研究センターでとても楽しい鍋パーティーをし、おいしい海鮮料理を食べました。これは私にとって初めてのことでした。私がびっくりしたのは木島先生が中国の有名なお酒「茅台」と「五糧液」をご馳走して下さいました。これらのお酒を飲んで、みんなと面白い話をして、最

高だと感じました。次の日、翠皓に乗船しました。日本はさすがに「環境保護大国」と呼ばれているだけあり、海水は澄み、景色はきれいで、とても気持ち良かったです。最後に、複合生態フィールド教育研究センターの研究施設と研究内容を紹介していただき、いろいろ知識を広げました。

この二日間の見学に参加して良かったと思っています。農学研究科国際交流委員会の先生方と複合生態フィールド教育研究センターの皆様、ありがとうございました。

教務係
穴澤 里佳

昨年の川渡フィールドセンターと鳴子温泉の旅に引き続き、今年度は女川フィールドセンターの施設見学を国際交流委員会で企画しました。女川フィールドセンターの教職員及び学生の皆さんの協力のもとに、留学生が8名（雨宮から5名、女川から3名）、国際交流委員会メンバーが委員長を含めた4名、そして職員として私と安倍さんの2名の参加で行われました。出発時は雪が舞い散る寒い朝でしたが、両日とも天気恵まれ、とてもよい旅行日和でした。

初日は松島水族館の裏側を職員の方の案内付きで見学しました。展示だけではなく、繁殖、保護も行っており、いつもとは違う水族館を見ることができ、参加者は皆興味津々で話を伺っていました。夜の懇親会ではマリナル女川の市場で購入した魚介類を木島先生、菅野先生、学生さん達に手際よく調理していただき、おいしく頂きました。

2日目は翠皓の乗船に女川フィールドセンターの施設見学と2日間とも盛りだくさんの内容で、留学生はもちろんのこと、私たち職員も仕事を忘れさせていただきました。

最後に木島先生を筆頭に女川フィールドセンターの教職員及び学生の皆さんのご協力のお陰で、楽しく施設見学を終えることができました。皆さんお忙しところご協力いただき本当にありがとうございました。

国際交流支援室
安倍 愛子

昨年の川渡フィールドセンター見学に続き、今年度は女川にあるフィールドセンター見学に同行させていただきました。

1日目はまず、松島水族館を見学。職員の方の案内で、通常はなかなか見学することのできない水族館の裏方も見せていただいたり、人間の心を癒す効果があると言われるイルカに直に触れることができました。午後、女川に到着し、マリナル女川内の市場で新鮮な海産物を間近に見たり、同じくマリナル内の博物館では、漁具等の説明に熱心に耳を傾け、またカツオの一本釣り体験に代わる代わる挑戦するなど、留学生の皆さんは興味がつきない様子でした。

2日目は実習船「翠皓」での女川湾クルージングから開始です。その後はセンター内の研究施設や研究内容の説明をしていただき、充実した見学旅行となりました。

参加した留学生の皆さんがとても楽しそうなお顔をしていただいていたことも大変印象に残っています。その様子を見て、私もなおのこと幸せな気持ちになり、日本で楽しい思い出をたくさん作りこの笑顔のまま充実した留学生活を送って欲しいと思いました。

お世話をいただいた先生方、フィールドセンターの職員および学生の皆さんに心より感謝しております。ありがとうございました。



海の幸やおでんを囲んで談話